

おと ゆう ま
小説:天戸祐輝

すずのね
挿絵:鈴音れな

少女が
平和を
探したけど
見つからなかった
件

これを
まもる方法



18
未 満

乙女系ドリームパルズ

試し読み版



咲舞桜香

Sakimai Ouka

名高い財閥のお嬢さま女子校生。ウサギ妖精から半ば強制的に任命されて性奉仕専門の魔法少女になってしまう。

Character

Contents

- プロローグ
欲望の根源
004
- 一章
わたし、魔法少女になりますわっ!?
008
- 二章
初めての任務の相手は……、
この人なんですのっ!?
043
- 三章
エッチな魔法少女は
こ～するの!
103
- 四章
目の前で奪われた初めて
149
- 五章
プライドの取り返し方
191
- 六章
想いの遂げ方
234
- 七章
新米魔法少女が世界を守る方法
273
- エピローグ
エッチな魔法少女
337

Ranheki Setsuri

嵐壁雪梨

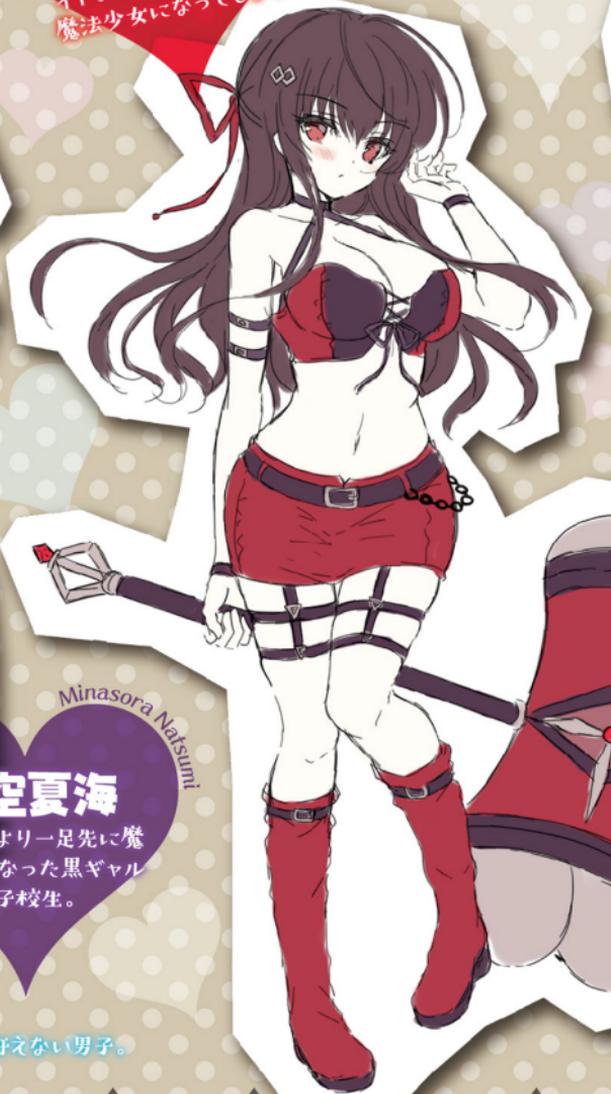
お嬢さまに仕える専属メイド。巻き込まれる形で魔法少女になってしまう。



Minasora Nabuni

南空夏海

桜香たちより一足先に魔法少女になった黒ギャル女子校生。



Koharu Shouichi

小春翔一

桜香の同級生の冴えない男子。

プロローグ 欲望の根源

人には知られない世界の裏側。

普通の生活では絶対に知ることのない事柄、事象、そして生物。

しかし、それが隠しきれることなど現代ではほぼ皆無だ。

裏を取ろうとするマスコミ、目撃者のSNS。

それだけではなく、街のいたる所にある監視カメラ。

十数年前なら隠しきれた世界の裏側も、現代では誰もが覗き見ることができる。

——魔法少女。

いつの頃からか異界からの魔物と戦い、人知れず人々を守ってきた少女たち。

その魔法少女たちが政府機関と手を組み、独立組織として人々に知られはじめたのがち

ようど十年前。

その頃は特撮だとバカにされていたが、彼女たちの必死な姿に憧れを抱き、今では魔法少女になろうと夢見る少女たちが絶えないほどだ。

しかし、その憧れが原因だったのだろう。

嗜好しこう的なその姿は男たちの欲望を掻き立て、新たな敵、異界から漂ってくる風に混じる物質、魔獣の因子に感染した人々を作り出してしまった。

通称『魔因子』に感染した人は性衝動の高まりとともに暴徒化、魔物に匹敵する力を持つ魔獣、理性や言葉さえも失い本能のまま駆動をする化け物となる。

人がそんな魔獣となつては世界の破滅だ。

幸い魔因子は罪意識のない人にしか効果はないが、その咎人とがにんは確実に、この世界に一定数存在している。

それは街中ですれ違う人、または隣に座る恋人かもしれない……。

※

初夏の季節、時刻はまだ日が沈んでから数分と経っていない頃。

工事中の線路に入らないように網の柵が並んだ場所、二十代前半の女性が数人の男に取り囲まれ、その身体を貪られるように性欲の捌はけ口ぐちにされていた。

「んう、んあつ、はあはあ、はむっ、んっんっんっ、そんなに奥まで……んうううっ」

背中まで届く黒い艶髪を頬に張り付かせた彼女が、少したれ目がちな黒い瞳に涙を浮かべ、赤いリップで彩られた花びらのような唇でペニスを啜すえている。

高い鼻にはすでに白濁液がかけられ、美しい輪郭の顔にはいくつもの粘液が流れていた。

「んっ、あつ、あああつ!! そんなに胸を……んっんぷっ、奥まで……んっ、んうううっ」
眉目秀麗、しかも色気まで漂わせている美貌から視線を下に向けてみれば、腰までスリットが入ったタイトワンピースがその用途を失っていた。

女を淫らに彩る代物にされたワンピースは胸元を下げられ、スリットを全開にされて下腹部が完全に露出させられている。

下げられた黒いレースのブラは釣り鐘型の大きな乳房を露出させ、同じ色の紐ショーツは片紐をほどかれて太ももに絡まっていた。

露わにされた柔房は何人もの手で揉み歪まされ、何も隠す布のない陰部とお尻には名前も知らない男の腰が当てられ、膣と腸内の深くにまでチンポが突き込まれている。

「ああっ、お腹の中でこそすれ、はむっ、のろの深ふまれ……んっ、んぢゅっ」

「俺の上で腰を振れよ」

「んっ、んうううっ、んあつ、あつ、あふっ、んんんっ」

膣を突き上げる男の言葉に従い、美女が騎乗位で腰を前後に動かしはじめた。

唇とお尻を犯している男たちも腰を速め、彼女を汚そうと興奮を高めていく。

「あふっ、んっ、んうううっ!! ビクビクひれ、あつ、出ふの? わらくひに精子を……んっ、んぶっ、んっんんっ、んううっ」

身体の中で感じるチンポの変化に、美女が諦めたように瞳を閉じた直後、興奮に目を血走らせた男たちが肉幹を引き攣らせた。

「んうっ、んっんっんっ、んぢゅぱっ、んっんっんっ、きて、わたくしの中に、わたくし
でいっばい……んちゅっ、んっんっんっ、んうううううううう——ッ！」

びゅるっ！ びゅくびゅるびゅぷっ！ びゅるるるるるるるるるるるっ！

美女が早く終わらせるように龟头をしゃぶり、腰をくねらせて膣とお尻のチンポを刺激した瞬間。

彼女を犯す三人の男たちが同時に快樂の声をあげた。

びゅくっ、びゅくっ、と噴き出す大量の精子は膣と尻穴、そして口腔を一瞬で満たし、
哀れな美女の三つ穴から胎外に溢れていく。

「んっ、んくっ、んっ、ゴクッ、んん……」

苦し気に呻き、瞳に涙を溜めた美女が精子を飲み込んだ。

しかし男たちの性欲はまだ満たされていない。

三人の男から解放された美女は再び別の男たちに貫かれ、新たに両手まで使わされながら、順番待ちで立ち並ぶチンポの前で性処理をさせられ続けた。

一章 わたし、魔法少女になりますわっ!!?

高級スポーツカーを先頭に、夜の高速道路を逆走している一団がいた。

特注の桜色のスポーツカーのあとには数台のワゴン、そして二つの車を収納できそうなトランスポーターが三台。

そのすべての車両が百キロを超えたスピードで走っている。

「このままでは間に合わないわ、後ろの車両を引き離してもいいから急いで」

「いいですね、現場についてもなにもできないかもしれないかもしれませんが」

生意気なネコのような青い瞳を輝かせ、高い鼻頭をツンツと上に向けた金髪ツインテール少女の言葉に、長い黒髪を軽く掻きあげた優し気な瞳の大人びた少女が答える。

紺を基調とした制服とメイド服姿のふたりは、間違いなく十代後半の少女だ。

一見不釣り合いな組み合わせの彼女たちは輝かせた瞳で見つめ合い、覚悟を決めたようにうなずいた。

「ノブレス・オブリージュー！ これも貴族の義務ですわっ」

「行きますっ！」

金髪少女の言葉を切っ掛けに、メイドがアクセルを踏み込んだ。

デジタルメーターは瞬く間に二百キロを超え、さらにデジタルの数字を増やしていく。高速道路で逆走、しかも完全な速度違反。

それにもかかわらず、対向車が来ない道では事故を起こさない。

カーブで対向車を気にしないドリフトを決め、タイヤのスキール音を鳴らしても赤色灯の車両に追われることなく、さらにスピードメーターをあげていく。

本来なら即逮捕の状況だが、今の彼女たちはそれが許されているのだ。

金髪少女の家は世界有数の財閥、しかも私財を投げ打って人助けをしているために、あの程度の違法行為は黙認されている。

その彼女たちが急行している先には黒い煙が立ち上り、幾多の車が破壊、横転させられて炎を舞い上がらせていた。

「桜香^{おウカ}さま、掴まってください!」

「いいわ、思いつきりやって!」

メイドの言葉に、桜香と呼ばれた金髪ツインテール少女が座席に身体を固定させる。

キィィィィィィィィィィィィィィィィィ!

甲高いタイヤのスキール音を鳴らしながら桜色のスポーツカーが横滑りし、破壊された

車の中で立っていた化け物に突っ込んだ。

「ブギウウウウウウウッ!!」

ドンっ！ と太鼓のような重低音が響き、車両に強い衝撃を感じた直後、彼女たちの車が醜い鳴き声をあげた化け物を跳ね飛ばした。

脂肪の塊のような化け物は硬いアスファルトで何度もバウンドし、数台の壊れた車にぶつかりながらやつと道路に倒れ込んだ。

「この程度で人々を苦しめようなんて、考えが甘いですわっ！」

ガチャッと凹んだドアを開け、白いシャツと紺色のミニスカートの制服に身を包んだ金髪の少女、桜香がその姿を見せた。

小さな唇は勝ち誇った笑みを浮かべ、適度に膨らんだ胸元がブラウスを蠱惑的に膨らませていた。

ミニスカートは風に靡き、肩幅に開いた白いニーソックスの脚を瞬かせた。

「豚の化け物！ アンタなんか魔法少女の手は借りないわ。このわたし、咲舞桜香さきまいが駆逐してあげる！」

意味もなく腰に手を当て、右手の人差し指をビシッと豚の化け物に向けて叫ぶ。まるでどこかの特撮ヒーローもののような光景だ。

「今すぐにその醜い首を差し出して、このわたしに断罪されなさい！」

決まった！ と本人は思っているようだが、現実がそんなに簡単に済むはずがない。豚の化け物、いわゆるオークは口から血を滴らせながら立ちあがり、怒りに満ちた目で金髪ツインテールのお嬢様を睨んだ。

「ギュルルル、グルルッ！」

夜風にオークの唸りが乗る。

街頭に照らされた金髪の少女、目鼻立ちが整い、幼さを残す顔に小生意気な表情をした彼女は、間違いなく美少女と呼ばれる部類だ。

適度な膨らみの胸も嗜好心をくすぐり、背が小さい身体も加虐心を掻き立てられる。

細い脚も性欲をそそり、揺れるスカートから今にも見えそうな陰部は、オークの股間を大きくさせるには十分な魅力だ。

「なっ!? どこを大きくさせているのよ化け物！ 醜い化け物ごときが、このわたしで興奮するなんて百万年早いですわっ！」

頬を赤らめた桜香が車の中からサブマシンガンを取り出し、オークに銃口を向けてトリガーを引いた。

本来ならサブマシンガンの反動に耐えられそうにない腕だが、彼女の物は自分に合わせ

た特注品。

そのおかげで腕をわずかに上下させるだけで弾丸はオークに当たり、殻になった葉莢が甲高い音でアスファルトに跳ねていく。

「グルッ、グルルルルルッ！」

生き物が弾丸に耐えられるはずがない。

オークは踊るように身体を揺さぶり、血を吹き出しながら地面に崩れ落ちた。

「これで駆逐完了ですわ！」

風にツインテールを靡かせた桜香が勝ち誇った笑みを浮かべた瞬間、血まみれになったオークの向こう、壊れた車の陰から何体ものオークが姿を現した。

しかもその中の一体は黒くて長い艶髪的女性を犯し、まるで自分の女であることを誇示するように大きな胸を揉んでいる。

「んっ、んあああつ、あう……あつあつあつ、んちゅうううつ!!」

たれ目がちだが目鼻立ちが整った美女の唇が奪われ、見せつけるように舌を絡ませた。

黒いタイトワンピースは意味をなさないほど乱れ、黒い下着をずらされた身体には精液の汚れがこびりついている。

「んっ、んちゅうっ、んっんっんっ、んあつ、んううううううう——ッ！」

「そんなはずありませんわ、わたしの銃弾が効かないなんてこと……」

「ブウォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

予備弾倉に替えて再び銃口を向けた瞬間、豚どもが大きな声で吠えた。

空気を振動させ、強風のような圧力に変わった空気は桜香を直撃し、制服のミニスカートを捲り上げて高級そうな白いショーツを露わにした。

「くっ、こんな汚い空気を……っ!？」

口から発せられた空気に幼さを残す顔を顰めた瞬間、見えたショーツに興奮したオークが目の前まで詰め寄ってきた。

桜香の銃弾で血まみれになったオークたちの目は性欲よりも強い獣欲にまみれ、成長の遅い小さな身体を見つめてくる。

「こ、この、わたしにさわろうなんて烏滸がましいのよ！」

胸も小さく、同年代の女の子と比べても成長が遅い身体。

そんな身体に大柄なオークの身体など受け入れられるはずがない。

まだ処女の桜香は恐怖を覚えながらサブマシンガンを放った。

「ブフッ！ ブグウウウウッ！」

肉に食い込んでいく銃弾、しかし分厚い脂肪が致命傷を阻んでいる。

撃たれた仕返しとばかりにオークたちは桜香に手を伸ばし、その小さな身体を犯そうと股間を大きくさせた。

「ふ、ふざけないでよ、誰が醜い豚なんかに！」

「避けてください、桜香さま！」

「——っ」

後ろから聞こえた透明感のある声に反応し、桜香は素早く身を屈めた。

「桜香さまを襲おうなんて、この私が許しません！」

ドライバースhirtから降りた長い黒髪の少女がメイド服のミニスカートを翻し、手に持ったショットガンをぶっ放した。

優し気な黒い瞳、高い鼻に整った唇。

まだ十代にもかかわらず大人びた雰囲気と美貌を持つメイドは表情を変えず、何度もショットガンを放って大きな胸を揺らす。

「ブグッ、ブヒイイッ！」

弾丸を変えて数発、やっとな一体のオークが地面に沈んだ。

「桜香さま、こちらに」

「え、ええ」

メイドと呼ばれ、ふたりそろって桜色のスポーツカーの陰に隠れる。

特注のサブマシンガンにショットガン。

魔獣退治の通常武装としては申し分ない装備だが、今回は不十分だった。

いつもなら現れる魔獣は一体か二体だが、目の前にいるオークは十体近くいる。

それが数人、あるいは数十人の人間に被害を与えているのだ。

今までの魔獣事件とすべてが違う。

「私があのおークたちを食い止めます、桜香さまは今通ってきた道をこの車で戻って後続車と合流、そのまま撤退してください」

「なにを言っているのかしら、このわたしが撤退なんてあり得ませんわ！ 魔獣は殲滅して勝利、それ以外は完全敗北なのよ！」

桜香が負けん気を出して叫ぶが、メイドは顔色を変えない。

完全な敗北、それはふたりともこの場でオークに襲われ、人間の尊厳を奪われるほどの陵辱を受けて孕まされることだ。

勝利できない状況に、メイドは冷静に判断して自分が犠牲になる道を選んだ。

「雪梨、あなたはなにを考えているんですの？ あなたを置いていくななんてわたしにできるはずがありませんわ」

「構いません、桜香さまが無事ならそれが最良の道です。メイドが主のために犠牲になるのは当然なのですよ」

雪梨と呼ばれたメイドが姉のように優しく囁き、笑顔で桜香の顔を自分の胸に埋めさせて金色の頭を撫でた。

「雪梨……」

「行きなさい桜香さま！ 絶対に振り向かず！」

「くっ」

桜香が車に乗ってアクセルを踏み込もうとした瞬間、数体のオークがスポーツカーに体当たりして横転させた。

あまりの衝撃に桜香は車から放り出され、アスファルトに背中を打ち付けて苦し気に呻いている。

「桜香さま!!」

慌てて桜香に近寄り、抱き上げて様子を見る。

身体に擦り傷はあるものの大きな怪我はない。命にかかわるような状態ではないのが見て取れた。

「雪梨……、ごほっごほっ、だ、大丈夫……よ……」

「よかった……」

お嬢様の安否にほっとしたのも束の間、ふたりの周りには欲情したオークが集まり、若い肉体を孕ませようと股間を勃たせている。

「わ、私を犯しなさい！ この身体の方が満足できるはずですよ！」

雪梨が桜香を守るように立ちあがり、メイド服に包まれた細い身体を彼らに見せつけた。丸く大きなFカップの柔房、くびれた腰、胸と同じように情欲をそそるお尻。

ミニスカートから見える白いニーストッキングに包まれた脚も細くて長く、成長の遅い桜香と比べればはるかに犯しがいのある身体だ。

「ブヒ、ブヒ……」

オークどもも雪梨の大人びた雰囲気欲情をそそられたのだろう、一体、また一体と近寄り、その身体に手を伸ばしていく。

「んっ、んうう……あつ、胸に……ああっ」

雪梨の大きな胸がメイド服越しに揉まれ、ミニスカートが捲られた。

清楚な白いショーツに包まれたお尻と陰部には顔が近づけられ、フゴフゴと鼻を鳴らし、匂いを嗅がれている。

「うっ、匂いなんて……」

初めてさわられる気持ち悪さ、そして大事な部分の匂いを嗅がれた悲しみに、雪梨の瞳から涙がこぼれた。

「や、やめなさいこのブタども！ 雪梨から離れなさい！」

姉のようなメイドの犯されそうな姿に、桜香は怒りのままオークを殴った。

しかし、鈍さえ効かない分厚い贅肉に、魔法少女でもない女の子の拳がダメージを与えられるはずがない。

桜香の腕は簡単に受け止められ、そのまま押し倒されて制服の胸元を引き破られた。

「きゃあああああつ！」

「桜香さま……ああつ」

桜香の悲鳴に雪梨が振り向くも、同じようにメイド服の胸元が引き裂かれ、下着に包まれた胸を露わにされた。

白いブラに包まれた大小の柔房は下着ごと舐められ、ショーツに包まれた陰部にも舌が這わされてくる。

「んっ、や、イヤあああああつ！ ブタがわたしの胸とアソコを舐めるなんて、やめなさい、やめてえええええつ！」

「お、桜香さま……んっ、ああつ、やめて、嫌っ、あああああつ!？」

桜香と雪梨が仰向けに倒され、胸と陰部に直接舌が這わされた。

ブラをずらされたふたりの乳首にはスライムのような唾液が塗され、薄ピンクの頂がムズムズとしたくすぐったさで急激に勃たされていく。

「や、やめて……そこは嫌ですわ……」

「そんなところを、あっ、ああ……」

股布を退かされた陰部に太い指が這わされ、淫裂を割り拡げられた。

誰にも見せたことのないサーモンピンクの粘膜は分厚い舌で舐められ、気持ちの悪い舌の感触が膣口にまでふれてくる。

お嬢様とメイドの姿に、オークたちはこのふたりを孕ませようとペニスを勃起させ、赤子の脚のような太さの肉幹に瘤を隆起させた。

「いや、イヤよそんな、わたしにそんなのを入れようとするなんて、そんな醜い……」

「お、桜香さま……」

処女喪失、そしてブタの牝にされる悲しみにふたりの瞳から涙がこぼれた。

夜の高速道路で肌を晒されたふたりの太ももは強引に広げられ、先走り液をダラダラと垂らしているブタペニスが膣口に押し付けられてくる。

「い、イヤああああああああっ！」

「くっ、くうううううううううっ！」

隙口に押し付けられた亀頭に桜香が叫び、雪梨が唇を噛み締めた瞬間。

「フレイルムブリット！」

凛々しい少女の声が響き、ふたりを犯そうとしていたオークたちが炎の弾丸に貫かれて吹き飛んだ。

「なにが……?」

「桜香さまっ」

大きな柔房を揺らしながら雪梨が桜香に駆け寄り、上半身を抱き起こす。

一瞬なにが起こったのかわからなかったが、ふたりの目の前にふわりと降り立った少女たちの姿で状況を把握した。

アニメで見るようなフレアスカート姿の少女たちが、ふたりを守るように立っている。

ピンク・レッド・パープル、その向こうにはグリーンとブルー、イエローやシルバーの魔法少女たちもいる。

彼女たちはオークを持ち前の武器で楽々倒し、あっという間に壊滅させた。

「こんなに簡単に……っ」

「またあなたなんですか？ 魔法少女でもないのに、魔獣退治なんて危険です！」

下着を直して立ちあがった桜香を、ピンク色の魔法少女が叱りつけた。

桜香と雪梨が必死で戦った魔獣をあつきりと倒した魔法少女たちは、幼さが残る顔に困った表情を浮かべているお嬢様を呆れ顔で見ている。

「このあいだも言いましたが、魔獣相手に銃ではほとんど効果はありません。怪我人の手当てをしてくれるのは助かりますが、戦わないでください」

「で、でもっ」

「いいじゃない、一度負けて酷い目に遭えばわかるんじゃない？ 今も犯されそうだったし、今度はめっちゃくちゃに犯されて孕まされるかもね」

「桜香さまになんてことをっ!？」

ピンク魔法少女の後ろに降り立ったグリーンの魔法少女が、邪魔だとばかりに桜香を邪険に扱った。

その言葉に雪梨は怒り、明らかな敵意の視線を向けている。

「キミも大変だね、こんなわがままのお世話で犯されそうになっちゃって、でも、このおちやまの暴走を止められないんなら同罪だよね」

グリーンの魔法少女が雪梨の胸に軽くふれる。

「このおっぱいなら魔物は大喜びだよ。今度は犠牲者が出る前に現れて、あなたが犯され

ていれればいいよ」

「わたしのメイドになんてこと言うのっ!」

「ふん、好き好んで魔獣事件にかかわるなら、せめてその身体を使って犠牲者を減らしてよ、そうすれば役に立つから。じゃあねっ」

「もう魔獣事件には首を突っ込まないでくださいね」

逃げたオークがまだいるのだろう、グリーン魔法少女が捨て台詞とともに立ち去り、ピンク魔法少女がさらに念を押してグリーンの後を追った。

「な、なんなのよあの女たち、わたしは人を助けるためにつ」

「……ですが、彼女たちの言うこともつともだと思いません。所詮、しよせん人の力では魔獣にはかなわないのですから」

雪梨が壊れた車のトランクからアタッシュケースを取り出し、その中から出した新しい制服を桜香に渡した。

「ありがとう雪梨」

破れたブラウスを替えながら唇を噛み締める。

「でも悔しいわ、わたしはノブレス・オブリージユの思想のもとにみんなを助けているのに、力が足りないなんて」

「魔法少女でないのですからしかたありません。今は怪我人の手当てをして、被害者を助けることに力を注ぎませんか？」

「そ、そうね……」

やっと追い付いてきた後続車が止まり、トランスポーターを開いて積んである簡易医療システムを立ち上げる。

それと同時にワンボックスの中からは咲舞家専属のドクターチームが現れ、イエローの魔法少女が手当てをしている怪我人に向かっていった。

「全員、助けられなかったなんて……」

破られたいくつもの女性の衣服や下着、そして犯されていた美女の姿もない。

おそらく、生き残ったオークが自らの子を孕ませるために連れていったのだ。

桜香は今も陵辱に遭っている被害者の姿を思い浮かべ、助けられなかった悔しさに唇を噛み締めた。

※

魔獣事件解決から三時間。

連れ去られた女性すべては見つからなかつたものの、とりあえず一つの事件が解決した桜香と雪梨は新しい同型のスポーツカーに乗り、都内にある館に向かって走っていた。

「わたしが魔法少女になれたなら、あんな事件はもつと早く解決できたのに……」
魔獣に犯されかけた悔しさと、魔法少女たちに受けた敗北感に打ちのめされながら桜香が呟く。

この時代の少女なら全員が憧れる魔法少女。

それは、『なりたいたからなれる』というものではなく、魔法を扱える遺伝子によって決められるものだ。

しかも、一般的に知られているのはそこまでで、どうしたら本物の魔法少女になれるのかは極秘になっている。

「桜香さま、あの魔法少女が言っていたとおり、これからは魔障害にあった方以外の怪我人の治療に専念してはどうですか？ それも立派なノブレス・オブリージュだと思います」

「で、でも戦わないと、人々を守ってこそそのノブレス・オブリー……」

「つ、掴まってく下さい！」

「きゃっ!？」

雪梨の言葉と同時に甲高いブレーキ音が鳴り、ふたりの乗った車が急停止した。

「な、なんなのいったい!! どうして急ブレーキなんか……」

冷や汗を掻きながら雪梨を見つめるが、彼女はまっすぐ前を見たまま動かない。

気になって彼女の視線を追ってみれば、見たこともない生物、羽が生えたウサギのぬいぐるみのような生き物が三匹、宙にふわふわと浮いてコチラを見ていた。

「雪梨、あれはなに？」

「知りません、わたしも初めて見ます」

冷や汗が背中に流れる。

ウサギのぬいぐるみのような生き物は、今まで確認されていない生物だ。となれば、魔獣よりも強力な異界の生物、魔物の可能性が高い。

「出てくるポリ」

「もうここは結界の中だエリ」

「誰にも見られることはないでござるマリ」

まるで決められたようにウサギのぬいぐるみ生物がしゃべった。

「出ていくしか、ないみたい……ね」

「ですな」

可愛い姿からは考えられない威圧感に、桜香と雪梨は車から出た。

繁華街の道路、しかし、そこかしこに虹色の帯のようなものが揺らいでいる。

店や街頭の明かりはいつもどおりなのに人はなく、車も走っていない。

明かりが点けられたままのゴーストタウン、その言葉がびつたりの光景だ。

「ボクの名前はポリンブ、魔獣事件担当の妖精ポリ」

青い首輪をしたウサギのぬいぐるみが口を開く。

「オレはエリンブ、異界から漂ってくる魔因子から人を救う妖精だエリ」

「拙者はマリンプ、人間界に現れる魔物と、悪の魔法少女討伐が担当の妖精でござるマリ」

「妖精……?」

突然現れた三妖精に警戒し、少し後ずさる。

「そ、その妖精が桜香さまになんのご用ですか?」

「まさか、魔獣と同じようにわたしたちを犯そうと……」

「そんなことはしないポリ、ボクたちは君をスカウトしにきたポリよ」

魔獣と同じと思われた青色首輪のぬいぐるみが慌てて否定する。

宙に浮きながら手足をバタつかせる姿は、可愛いおもちゃのようだ。

「クスクスクス、可愛らしい姿だわ、こんな可愛らしい妖精さんが魔獣と同じだとは思えないわね、それで、わたしになんのスカウトをしてくれるのかしら?」

「信じてもらえてよかったポリ、では伝えるポリよ」

ポリンブが^{たたく}竹まいを直し、スーッと桜香の前に移動して青い瞳を見つめた。

「君は魔法を扱える遺伝子を持っているポリ、だから魔法少女になって欲しいポリよ」

「わたしが、魔法少女に——!!」

その誘いに、桜香はしばらく口を閉ざした。

★☆☆★

魔法少女にスカウトされた翌日、桜香と雪梨は私立学園の生徒会室にいた。

「どうするのですか桜香さま、魔法少女へのスカウトは？」

「ノブレス・オブリージュ！ 当然なるわ、それが貴族の義務だもの」

「そうですか」

生徒会相談役、とプレートに書かれた机で紅茶を飲んでいる桜香が、蠱惑的な笑みを浮かべる。

同年代の少女と比べても幼い容姿の桜香が、豪華な机で笑みを浮かべている姿は異様、まるで似合っていない姿だ。

しかし、それもそのはず。

この机の本来の持ち主は桜香の隣で立っている制服姿の雪梨。すでに卒業している彼女が学園に残っているため、特別に作られたものだ。

しかも机に設置された数台のPCとディスプレイは、世界中の情報を得られるほどの高

性能である。

「桜香さま、これを見てください」

「ん？ なにかしら？」

雪梨が一つのモニターを指し、そこに映された異常事態を教えた。

その画面には隣町のある地点で魔獣が発生し、何人かの魔法少女がその対処にあたっていることを示している。

「行きたいけど、今は無理だわ。それに今日は大切なお話があるもの」

「そうですね、桜香さまが自主的にお休みした授業もそろそろ終わりますし、お約束の場所に向かいますでしょうか？」

「そうですね」

桜香の返事とほぼ同時にチャイムが鳴り、廊下に生徒たちが出はじめた。

「車の用意はできているの？」

「先日の事件で壊れた車のスペアを急遽改造して、より強度を増したものを用意させました。これで今までよりは安全性を確保できると思います」

「ありがとう、いつも手際が良いわね」

雪梨の手際の良さを褒めながら階段を下りきった瞬間、廊下に出た桜香の前にひとりの

男子が現れた。

「きゃっ」

思わず可愛らしい悲鳴をあげ、金髪のツインテールを揺らしながら尻餅をつく。

「え？ あっ、咲舞さん……」

雪梨とほぼ同じ身長男子が眉を下げ、困ったような顔で見つめてきた。

頬を赤く染めた彼はオドオドし、幼い顔と相まって子供のような印象を与える。

「だ、誰ですのっ!？」

「ぼ、僕は……その……」

「その、なんですのっ!？」

容姿と相反する桜香の気の強い態度に男子が委縮する。

弱々しくて冴えない男子、それが彼の印象だ。

「まったく、少しは前を見て歩きなさいよ」

「桜香さま、前を見てなかったのはあなたです。この男子に落ち度はありません」

「でも、女子にぶつかったら謝るのが紳士のマナーじゃない！ それを怯えながら見てる

だけなんて許せませんわ」

「そうかもしれないませんが、そのマナーをまだ十代の男子に押し付けるのには無理がありま

す。それに、彼が黙っているのは桜香さまに責任があるのですよ」

「わたしに責任って……?」

雪梨が「そこです」と桜香のスカートに視線を向けた。

そこは尻餅をついた衝撃でスカートが捲れ、白いショーツが完全に見えている。

「な、なななっ!？」

桜香の幼い顔が急激に赤く染まり、唇がわなわなと震える。

同じ年らしい男子にショーツを完全に見られた。

しかも脚がM字に開いているために、白いニーソックスに彩られた太もも、そしてショーツの薄い布に陰影をつけている陰部や、淫裂の縦皺まで晒している状態だ。

オマンコを魔獣に見られた経験はあるとはいえ、同年代の、しかも同じ学園の男子に見られた恥ずかしさには耐えられない。

「い、いつまで見ているつもりですのっ!」

「え? いつまでって……うわっ!？」

パチンッ!

慌てて立ちあがった桜香が真っ赤な顔で男子の頬を叩いた。

しかし、その恥ずかしさに駆られた行動が、男子に新たな悲劇を呼ぶ。

彼の小さい身体はよろけ、今度は雪梨の胸に顔をうずめてしまったのだ。

「あら？」

雪梨の大きな胸は男子の顔をふわりと包み込み、白いブラウスのボタンが数個弾けて白いブラを晒した。

「せ、雪梨になにをしているのかしら？ この変態！」

「へ、変態なんて、僕はなにもしてな……」

「反論する前に胸の谷間から顔を離しなさい、この変態！」

桜香が男子の襟を引っ張り、彼を雪梨の胸から引き剥がした。

ブラと胸元を露わにしてしまった雪梨は優し気に微笑み、手際よく用意していたクリップでブラウスを直している。

「最低ね、ふんっ」

もう呆れて言葉も出ない、といった態度で桜香は鼻を鳴らし、尻餅をついた男子から離れていく。

オドオドした冴えない男子、こんな人には興味はないといった態度だ。

「もう桜香さまったら、気にしないでくださいいね」

桜香の態度に呆れた雪梨はクスリと笑い、倒れた男子に一言伝えてお嬢様の後を追った。

「最低だわ、あんな冴えない男に下着を見られるなんて」

「ふふ、でも可愛らしい男子だったではありませんか？ 私、ああいう素朴で純情そうな子は好きですよ」

「趣味悪いわよ、雪梨」

冴えない男子の話をしながら校舎を出たふたりは、桜色のスポーツカーに乗って三妖精との約束の場所に向かった。

☆☆☆

学園でも有名な金髪ツインテールの咲舞桜香。

そして、その彼女と同じく有名、そして誰もが憧れる大人びた美少女の嵐壁雪梨らんへきに出会った冴えない男子は、廊下に座りながら呆然ぼうぜんとしていた。

「咲舞さんのパンツに嵐壁先輩のおっぱい……」

目立つこともなく、同年代の男子とは比べられないほど小さくてひ弱な身体、しかも顔だって幼い。

そんな彼にとって偶然見てしまった下着と、大きな胸の感触は衝撃的だった。

しかも、嵐壁先輩は気づかなかつたらしいが、彼女が咲舞桜香を追っていった瞬間、スカートがわずかに捲れて白いショーツに包まれた桃のようなお尻が見えたのだ。

経験のない桜香と雪梨は、それ以外の行為が思いつかなかった。

「ああ、早く、早く出させてください！ おっぱいだけじゃもう出せない、今みたいにびゆるびゆる出せないよ！」

「んっ、あああつ！ そんなにアソコの中で指動かさないで……あ、あんんっ！」

「胸が擦れて、きやあつ、またビクビク震えて」

「早く、早く出させて！ 早くうううううう！」

「あつ、そんなにお腹の中で、あああつ、ふあああああああああつ！」

射精を求めた翔一が指を激しく出し入れさせ、膣内でお腹側を擦ってきた瞬間、桜香は下半身が感電したような痺れを感じ、身体を震わせながら床に崩れ落ちた。

ツインテール魔法少女のアソコからは漏らしたように愛液が溢れ、小ぶりな柔房が呼吸に合わせて大きく揺れてしまう。

「あ、ああ……んんっ！ わ、わたしまた……またこんなに簡単に……」

「桜香さま……」

立て続けの絶頂に息を喘がせる桜香を、おっぱいを突かれ続けている雪梨が心配そうに見つめてきた。

「だ、大丈夫……んっ、ですわ……はあはあ、あああつ！」

桜香の身体が軽く痙攣し、膣口から愛液がプシュツと吹き出した。

「桜香さまがこんなに……、これ以上負担をかけないためにも私が……」

桜香の姿に雪梨が処女喪失の覚悟をした直後、翔一が胸の谷間からペニスを離した。

「ど、どうしなさったのですか？ もう私の胸は飽きて……」

性奉仕が稚拙なのはわかってる。

初めての経験、しかも男性器を目にしたのも今日が初めてだ。

どんなに身体を見せ、どんなに胸を好きなようにさせても、この可愛い男子が満足しきれないのがわかる。

「あ、あの……私でよければオマ……」

「く、口でしてください、ふたりの口でしゃぶってくれたらすぐに出るから」

雪梨が処女を彼に捧げようとした直後、翔一が新しい奉仕を求めてきた。

処女を失うよりは楽な奉仕、しかし桜香まで唇を穢すその行為に雪梨の心が揺らぐ。

「ま、待ってください、桜香さまが口でする必要なんてありません、私の処女を……」

「待ちなさい雪梨、はあはあ、自分のメイドを守るのも主の務めよ、ノブレス・オブリー

ジュ！ あなたのその願い、このわたしが叶えてあげますわっ」

可愛らしい美貌に生意気な笑みを浮かべた桜香が翔一を見上げた。

「桜香さまなにを言っているんです、主を守るのはメイドの……」

「こんなところで雪梨の処女を穢させるわけにはいかないわ、私も唇を穢すことでこの男子を浄化できて、あなたも助けられるのなら唇くらい安い物ですわ」

真つ赤な顔でまっすぐ雪梨を見つめる桜香の姿に、メイドは黙り込んだ。

こういう時の彼女は、雪梨がなにを言っても絶対に引かない。

「わかりました、では一緒に」

「ええ、この唇のすごさ、教えてあげますわ」

根拠のない自信に微笑みながら、桜香は翔一のペニスに唇を近づける。

「こ、こんなに大きなモノだなんて……、どうしたらこんなになるのよ、もうっ」

「ど、どうしたらって言われても、こんなに大きくなったの初めてで……くああっ」

「きゃっ、今ビクンって!? それになんか垂れて……」

ふたりの美少女を前に肉幹が脈打ち、拳のような亀頭からカウパー腺液が飛び散った。

彼女たちの手首はありそうな肉幹には血管が浮き出し、表面に現れていた瘤が徐々に大きくなっていく。

「早く、咲舞さん早く啜えて、精液吸い出してください!」

「わ、わかってますわ! そんなことくらい……」

「ま、待ってください桜香さま、先に私から……ん、んむう」

戸惑っている桜香を前に、雪梨が先に唇を開いて亀頭を包み込んだ。

右手は軽く肉幹を包み、上下に動かして扱っている。

「くあつ、あああつ、これすごい、嵐壁先輩の口の中熱くって、舌が先っぽ舐めてきて」
「き、気持ちいいふいれふか？ んっ、んぶあ、このままらしてくださいされもいいんれふよ」

「気持ちいい、気持ちいいです嵐壁先輩！ すぐに出しちゃいなほど気持ちよくて」

「んちゅっ、んぶっ、んっんっんっ、んちゅぶっ、んうううっ」

パイ擦りの最中に偶然入ってしまったフェラチオと違い、本格的な口淫に翔一の腰が前後に動く。

雪梨もフェラに慣れ、ぎこちなさを残しながらも滑らかにチンポをしゃぶり、丹念に亀頭に舌を絡めている。

「んぶっ、喉にまれ……んぶっ、んっ、んううっ、んちゅっ、んぶあつ、んぶっ、んんっ」
「気持ちいい、すごく気持ちいいよ、すぐに出そうだけど……」

生温かな口の中で暴れるペニスに雪梨は必死に舌を絡め、肉幹を扱って今にも出そうな射精を促した。

チンポのムズ痒さに翔一の腰は速まり、早くも肉幹をピクピクと引き攣らせている。

「んちゅっ、んふぁ、出ひれ、私の口にいつふぁい……」

自分だけで満足させようと雪梨が優し気な美貌を前後させ、上目遣いのまま形の良い唇を歪めて亀頭にしゃぶりついた。

口の中ではカウパー液が飛び散り、熱い亀頭が雪梨を自分の物にしようと舌裏や頬裏、そして喉まで激しく突いてくる。

「んちゅっ、んぶっ、んううっ、んちゅぱっ、んうっ、んっ、んちゅっ、んっんっんっ」

「雪梨……」

瞳に涙を溜めて奉仕する雪梨、その淫らな奉仕姿を呆然と桜香が見つめる。

精液まみれの大きな柔房を揺らし、お尻まで見せてペニスをしゃぶる姿は淫乱な女そのものだ。

しかし、桜香には男を助けるために必死で奉仕するその姿が美しく見え、同時に自分の身体の内から込み上げてくる性的な欲求に、自らの胸を揉みはじめてしまった。

「咲舞さんも我慢できないみたいだから、今度はこっちに……」

「え、ええ？」

「んちゅっ、んっんっんっ、んぶぁ……ごほっごほっ、はぁはぁはぁ……」

桜香のいやらしい姿に翔一が興奮し、雪梨の口から引き抜いた唾液まみれのペニスを可

愛らしい美貌に向けてきた。

「ま、待ってください……ごほっごほっ、私の口で……」

喉奥を突かれて咽る雪梨が、舌尖からダラダラと唾液を垂らしながら自分が最後までしやぶると肉幹を掴んだ。

しかし魔因子感染者のペニスは硬く、まっすぐ切っ先を桜香に向けたまま動かない。

「すぐに出るから早く、早くしゃぶって、早く!」

「わ、わかっているわよ……」

「桜香さまダメです……ごほっごほっ、私が……」

「んろ……んちゅっ、んっ、んろ……ん……ん……ん……」

雪梨が止めるのもかまわず、桜香は小さな舌を出して亀頭をチロチロと舐めだした。

雪梨の吸い付くようなフェラとは違い、ムズ痒さだけを煽るような舌に翔一は興奮し、先割れから濃いカウパー腺液を溢れさせて桜香の舌を汚してくる。

「んっ、変な味……、こんなの舐めてるのにお腹の奥が熱くなって……」

「さ、咲舞さんが僕のチンポ舐めてる……ああっ、気持ちいい、これすぐに出る、咲舞さんの口にすぐにっ」

「んろっ、そんなに喜ぶなんて、こんなことでそんなに……んぶううっ!? ま、待って、



口の中になんて……んううっ、んぶっ、んちゅぶううううううっ!」

戸惑う桜香を無視して、翔一が金髪ツインテールの頭を押さえて強引に口の中に亀頭を押し込んできた。

可愛らしい唇は淫らに歪み、小さい口の中で亀頭が暴れる。

「んぶうえっ、んぼおっ、んぶえっ、んうえっ、んちゅぱっ、んっ、んぶうううっ」

「気持ちいい、咲舞さんの口の中すごく気持ちいい!」

「む、無理ふいらいれ、んちゅぶっ、んう、んちゅぼっ、喉の奥までなんて……んぼっ、んえっ、ぶぢゅぼっ、んぼっ、んぶっんぶっんぼっ、んぶうううっ」

桜香が瞳に涙を溜めながら顔を前後に揺さぶられ、強引なフェラに耐えだした。

翔一の腰に合わせて頭が揺さぶられるたびに思考が混濁し、頭の中にまで響いてくる喉奥を突かれる衝撃に被虐の喜びが湧いてくる。

口の中は熱い亀頭が滑らかに動くように唾液が溢れ、ペニスがピストンするたびに唇の端からこぼれだした。

「んぼっ、んっ、んぶおっ、酷ひころさされるのに……んぶっ、お腹の奥が熱ふらつて、んちゅっ、イッていいわ、わらしの口でイッてもいいから……、んぶっんぼっんぶえっ」
ぐじゅぼっ、ぐぶっ、ぐぼっぐぼっ、ぐぢゅぼっ!

淫らな口淫の音、男の加虐心を煽るイラマチオの音が部屋に響き渡る。

しかし、桜香は屈辱も、唇を犯されている悲しみも感じない。

それどころか被虐の喜びを感じ、自ら頭を前後させて口での奉仕をはじめてしまった。

胸を揺らし、スカートからお尻を見せて翔一を興奮させた桜香は、亀頭をしゃぶりながら左手で自分の胸を揉み、右手を陰部に滑り込ませて膣口に指を差し込んでいく。

「んっ、んうううっ！ これたまらないふぁ、頭の中クラクラひれ、アソコも……オマソコもジクジクして気持ちいふいれふの……んちゅぶっ、んぶっ、んぢゅ、んんっ」

「桜香さま、私もお手伝いします……んちゅっ、んろ、んちゅっ、んろ、んちゅぱっ」
桜香を手伝うように雪梨が横からペニスに顔を寄せ、肉幹に舌を這わせだした。

手は桜香と鏡映しになるように胸と陰部に這わせ、翔一に見せるように大きな柔房を歪め膣口に軽く指を出し入れさせる。

「んっ、んぢゅぽっ、雪梨まで……んぶっ、興奮すまふわ、すごく興奮ひれ、ぶぽおっ、んぶっ、んぶえっんぶっ、んえっ、んぶえええええっ」

「桜香さま、んちゅぱっ、んんんんっ、私もおかしく、んちゅっ、んんんんんっ」
「うわああ、出る、出るうううっ！」

雪梨と一緒に舐めるチンポに興奮し、オナニーしている膣がジクジクと疼きだした。

口の中の亀頭も熱さと大きさを増し、唇に肉幹を上ってきた濁液の感触が伝わってくる。「わらひも……んぶえっ、わらしももう、んぶっんぶっ、もふうううううっ」

「んちゅぱっ、んっんっんっ、桜香さま私もです、私ももう、んちゅうううううっ」

「ああっ、出る、出るよ咲舞さん、咲舞さんの口にいっぱい、いっぱい出るっ!」

びゅるるっ! びゅぷっ! びゅるるっ! びゅりゅびゅぷっ! びゅるるるるっ!

「んぶうううっ!?! んぽおおおおおおおお—— ツ!」

「んちゅっ、んっ、あんんんんんんん—— ツ!」

桜香の喉まで亀頭が突き刺さった瞬間、肉幹が激しく脈動し、大きく膨らんだ亀頭から生クリームのような精子が噴き出した。

同時に胸に指を食い込ませて揉み、細い指の第二関節まで膣に挿入したふたりも全身を痙攣させ、小さな膣口を捲り返すようにして愛液を吹き出している。

奉仕オナニーでの絶頂に桜香と雪梨は全身が痺れ、精液に反応するように絶頂し続けてしまう。

「んんっ、んうっ、んんんんっ! んあっ、桜香さま……桜香さまっ」

「んう……んぶえっ、んぽ……ゴクッ……んぶっ、ゴクッ……んぶえっ、んぽえええっ!?!」

雪梨が肉幹にしゃぶりつきながら身体を硬直させた瞬間、眉を下げて口内射精を受け止めていた桜香が大量の精子を飲みきれず、可愛らしい唇を捲り返しながら溢れさせた。

唇から溢れた精液は形のいい柔房を汚し、ピンクの乳首まで白く染めて服の中にまで流れ、お腹、そしてショーツをずらされた陰部やお尻まで穢して床に滴っていく。

しかもその射精は一分以上続き、数人がかりで桜香を犯したように熱い精液で汚し尽くした。

「うっ、うああああつ！　すぐく気持ちいい、すぐく……」

「んぼっ、んぶえ、んぶうううううっ!!　ごほっごほっ、こ、こんなに……、身体中が灼けるように熱くて……すごい匂い……んううううううううう——っ!」

淫唇の奥に流れ込んだ精子が膣口にふれた瞬間、桜香はその感触と熱を膣内に感じたようにまた愛液を吹き出した。

絶頂を繰り返す桜香の前では翔一のペニスが小さな体格に相応しい大きさになり、身体を光の粒子に包まれながら倒れていく。

「こ、これで……はあはあ、魔因子の浄化は完了ですの……?」

「んっ、ああ……はあはあ、そ、そうみたいですわ……んんっ」

自分が助けた男子を見ながら桜香は嬉しそうな、そして生意気な笑みを浮かべた。

「これで犯罪者にしなくて済みましたわ！」

人を救えた優越感に桜香は身体が汚れているのも忘れて立ちあがり、柔房を小さく揺らしながら胸を張った。

人を助けられた優越感に喉を犯された苦しみも忘れ、いつものように生意気で可愛らしい笑みを浮かべている。

「……桜香さま、はしたないです」

自分しか見てないとはいえ、主のあまりの姿に雪梨が顔を曇らせる。

雪梨も精液まみれだが、桜香はそれ以上だ。

可愛らしい顔も、小ぶりで形の良い胸も、広がった陰部までもが白く染まっている。

膣口からは絶頂の名残りがポタポタと滴り、淫らを通り越して卑猥すぎる姿。

まるで精液のシャワーでも浴びたあのような状態だった。

「……し、しかたないじゃない、これも人助けをした証よっ」

「そうですね、ではこの男子の記憶を消して立ち去りましょうか」

「そ、そうね……」

雪梨が素早く翔一の額に手を置き、覚えてたの記憶操作魔法でここで行われた性奉仕、もと、魔因子浄化の出来事を消す。

「ところで……、この身体どうすればいいのかしら？」

桜香が困ったように自分の身体を見る。

全身精液まみれ、魔法少女から普通の状態に戻ったとしても、この汚れが消えているとは思えない。

「はぁ~~~~、ほんっと考えなしなんですから、汚れは私が魔法で綺麗にして差し上げます。でも、その前にこのビルにあるシャワー室をお借りしませんか？」

「それいいわね」

雪梨の提案に即答した桜香は、生意気な笑みを見せながらシャワー室に向かった。

素股をするようにペニスを動かされ、肉幹の硬さと熱さに桜香の顔が強張る。

初めて感じる膈への雄熱、それを前に処女を失う悲しみが込み上げてきた。

「やめろ、やめてよ……、咲舞さんに酷いことしないでよ……」

翔一が桜香を助けようとしているが、小太りの男子がそれを押さええている。

痩せメガネの男子のあとにあの男子にも犯されるかもしれない。

好きでもない男たちに身体もてあそを弄ばれる悔しさが心に広がり、同時にその姿を翔一に見られる悲しみが込み上げてきた。

「へへ、それじゃいくぞ」

「くうううっ」

膈口に当てられた亀頭に、桜香が悔しみながら唇を噛み締めた瞬間。

「たった三人相手に負けるなんて、エッチ魔法少女失格う～～」

人をバカにしたような声とともに、日に焼けた肌の少女が痩せメガネの男子を抱きしめ、桜香の身体からするりと引き剥がした。

「そんなおこちゃま相手にしても、な～んも面白くないっしょ」

細い身体に大きな胸とお尻をした茶髪の美少女、しかも彼女が着ているのは下着そのもののような服だ。

胸を強調するようなミッドナイトブルーのブラに、隠す面積がほとんどない同色の紐パン、そして透けた極ミニのスカート、まるで男を興奮させて喜んでいるような服装だった。

「夏海ねえ……」

「お、おまえ、ヤリマンの南空夏海かよ！」

「あはは、あくしのこと知ってたんだ、しかもヤリマンとか言っちゃってるし、もしかしてあくしのパンツ見てこうやったことでもあんのかな」

「こうやったって……ううっ!!」

びゅるびゅるびゅるっ！

「きゃっ!!」

夏海が淫らに微笑みながら痩せメガネ男子のペニスを軽く扱いた瞬間、亀頭が瞬く間に膨らんで射精しだった。

まだ水っぽい精子は弧を描いて宙を飛び、上半身を起こした桜香の可愛らしい顔にびちやびちやかかかっていく。

「あはは、おこちゃまの顔が精液で汚れちゃった。これで正常位なんてやったら自分の精子が顔についちやうよ」

「う、うむ……」

さすがに、精子を顔につけるのは嫌がった瘦せメガネが顔を曇らせた。

「エッチはしたいけど精子にふれたくないなら、シックスナインなんてどお？ 君が仰向けに寝て、その上にほら、アンタが乗んの」

「わ、わたしがって……きゃっ」

夏海が桜香を無理やり動かし、瘦せメガネの顔を跨ぐように四つん這いにさせた。

自然とシックスナインの体勢になった桜香の陰部はメガネ男子の顔に近づき、可愛らしい顔の前には射精したばかりのペニスが龟头を膨らましている。

「うおおおおおっ!? お、オマンコが丸見えだ」

「い、イヤよ、見られるなんて！」

「いいから見せながらしゃぶってあげんの、ほらっ」

「ほらっって、んううっ、んぼっ、んぢゅぶううううっ!!」

金色の頭が押され、桜香の唇が瘦せメガネ男子のペニスを包み込んだ。

同時にシヨーツはメガネ男子の手で横にずらされ、露わになった陰部に舌が這わされてくる。

「んぢゅっ、んぼっ、んぢゅっんぶっ、んちゅぱっ、舐められ……んぢゅっ、んんんっ」
覚悟を決めてペニスに舌を這わせた途端、瘦せメガネ男子が桜香の膣に舌を差し込んで

愛液をすすった。

口に感じる気持ちの悪いチンポの感触、それと同時に陰部を舐められるくすぐったさに頭が混乱し、自分がなにをやっているのかわからなくなっていく。

この男子を満足させれば、射精させてあげれば気持ちの悪い行為が終わる。

桜香はその気持ちだけでチンポをしゃぶり、亀頭に舌を這わせる。

「んうううっ、んあ……おかしく……おかしくなりますわ……んちゅっ、んぼっ、んちゅばっ、んちゅっ、んぶっんぼっ、んぢゅるるっ」

ぴちゃぴちゃと陰部を愛撫され、膣内に舌を差し込まれて内壁を数回舐められた瞬間、桜香の中でなにかのスイッチが入った。

陰部や膣を見られることで背筋が痺れ、口の中のチンポが可愛らしく感じていく。

嫌悪感はどこかにふっとび、片手で熱い肉幹を扱きながら、金色の頭を上下させてペニスにしゃぶりついてしまう。

「なにかおかしいですわ、こ、これが欲しくて、んちゅっ、んっんっんっ、んちゅばっ」「やゝればできんじゃないん、じゃあ、翔々たちはあゝしが、ふふ」

桜香にメガネ男子を押し付けた夏海が、淫蕩な笑みで翔一と小太り男子に近づく。

「夏海ねえ、その格好は……」

「あゝしの魔法少女姿に興奮しちゃった？　大きなチンポがビクビクしてるよ」

今にも大きなおっぱいが見えてしまいそうなミッドナイトブルーのブラ、そして隠している方がいやらしく感じる紐ショーツに、翔一のペニスがさらに大きくなった。

女性の二の腕から先ほどになったチンポからは先走りの液が漏れ、トロトロと肉幹に伝っていく。

「そっちの小デブも我慢できないみたいだし、あゝしがまとめて相手したげるね」

「な、夏海ねえ、いきなりなにをし……うあああっ!!」

桜香に見せるように翔一の前で膝立ちになった夏海が、自らブラを下げながら彼のペニスを握った。

「あははっ、翔うちのチンポ大きい、あゝしの顔より大きいんじゃない？」

「そんなに大きくは……あああっ」

肉幹にキスをされた翔一が女の子のように喘ぎ、身体をピクピクと震えさせる。

「翔うち可愛い、あゝしのおっぱい見ながら気持ちよくなっているよ、あと小デブはここを相手したげる」

夏海が大きなおっぱいを揺らしながら翔一の肉幹を扱き、余っていた手でTバックの紐を横にずらして、小太り男子にお尻の穴を見せた。

「夏海ねえがお尻でエッチしながら、おっぱいこんな揉まれて……あああ、あああ」
「んちゅっ、んっんっんっ、翔ち悔しい？ あくしが他の男に犯されて悔しい？」
夏海が激しく喘ぎながら翔一のペニスをやぶり、胸を揉まれながらお尻を犯されている姿に、翔一がさらに興奮を高めた。

幼馴染みのペニスをしゃぶりながら、おっぱいとお尻を別の男に捧げている背徳感に夏海の興奮も高まり、淫唇の奥から溢れた愛液がポタポタと床に滴っていく。

「小春、おまえの幼馴染みのお尻は最高だ、おっぱいも気持ちよくて、かぷっ」

「んあああああ、首……あんっ、首噛まないで、あんんっ、チンポもすぐくて、あつ、んちゅっ、翔ちフェラだけでイカせてあげる、んちゅっ、んっんっんっ」

小太り男子の腰が速まり、夏海の身体が激しく揺すられた。

大きな胸もめちやくちやに形が歪み、薄赤い乳首が太い指で押し潰されている。

ジクジクとムズ痒いお尻の気持ちよさ、そして胸を揉まれる気持ちよさに夏海の腰も淫らにくねり、まるで恋人とセックスをしているように小太り男子のチンポをお尻で抜き、腸壁を亀頭に絡み付かせる。

「んっ、んあああ、あんっ、お尻が気持ちいいの、あんっ、あくしのお尻気持ちよくて、はあああ、おっぱい揉んで、もつと強く、強くっ、んちゅぱっ、んちゅっ、んっんっ」

「な、夏海ねえ、ううっ」

幼馴染みのいやらしすぎる姿に翔一のペニスもビクビクと脈動し、大量のカウパー液を彼女の口に溢れさせてきた。

腰も自然に動き出し、幼馴染みの口をオマンコに見立ててペニスを突き立ててくる。

「んちゅっ、んぷああああつ、翔くちの先走り多くて、んくっ、おいしい、はあはあ、小デブのチンポも激しく動いて、ああつ、あつあつあつ、あゝしイッチャう、翔くちのチンポしゃぶりながらお尻犯されてイッチャう！」

小太り男子が激しく腰を振り、今にも射精しようとして肉幹を太くさせはじめた。

夏海のおマンコからはダラダラと愛液が滴り、男子の精子を欲しがってお尻が震えているのまで見える。

「な、夏海ねえ……ああつ!!」

「んちゅっ、んっ、ビクビクして……あんっ、で、出るの、あゝひの口に……んちゅっ、んっんっんっ、んうううううううっ！」

幼馴染みのアナルセックスを見せつけられる背徳的な興奮に、翔一が今にも射精しようとして肉幹を震わせた瞬間、桜香の艶めかしい声が彼に聞こえてきた。

「んちゅっ、んっ、んちやぱっ、んっ、はあはあ、イク……わたしおチンポしゃぶりなが

らイク、アソコ舐められて……んちゅっ、んっ、ちゅぱちゅゆる、んちゅううっ」

桜香は、もう自分がなにをしているのか理解できなかった。

ただ感情のおもむくまま痩せメガネ男子のペニスをしゃぶり、お尻を上下に動かして今まで知らなかった男子にオマンコを押し付けてしまう。

可愛らしい顔はいつの間にか淫蕩な笑みを浮かべ、長いツインテールがひと揺れするたびに、ペニスの半分ほどを啜えてねっとりと舌を絡めてしまう。

「んちゅっ、はあはあ、んう、んっ、んんっ、もっとなたしのも舐めて、奥まで舌を入れてんちゅっ、んぶっんぶっんぶっ、んぢゅううううううううううっ」

桜香の声を聞いた痩せメガネ男子が陰部にびったりと口をつけ、突き出した舌を膣の奥にまで差し込んできた。

魔因子に感染した彼の舌は丹念に肉壁を擦り、まるでナメクジのように動いて処女膜をぞろりと舐めてくる。

「んあああつ、ああつ、あつ、気持ちいい、ふあああああつ、これも、これもわたしの口でんちゅっ、んっ、んむううううっ、んうえ、んぶっんぽっ、んぢゅううううっ」

お返しにとばかりに亀頭を喉奥にまで飲み込み、音を立ててしゃぶりつく。

イキかけたペニスは肉幹を脈打たせ、桜香の口を自分の物にしようとうと亀頭で頬裏まで突

いてきた。

「あはは、あのおこちゃま魔法少女もイッチャイそう、んちゅつ、はあはあ、みんないっしょにイこう、みんな一緒に、んあああつ、あつ、あつ、んちゅうつ」

「んっ、イク……みんな一緒に……わたしも口で精子……っ!？」

全身汗まみれにしている夏海の声に桜香が振り向いた瞬間、今自分がしている行為が急に恥ずかしくなった。

エッチ魔法少女の性質で性行為に抵抗がなくなっていたが、今の自分は見知らぬ男子に陰部を見られ、しかも膣内に舌を差し込まれながらペニスを夢中でしゃぶっている。

桜香の瞳は翔一を映し、互いに別の相手に奉仕し、奉仕されている姿に背德的な興奮を覚え、全身が掻き^{むし}筆りたいほどのムズ痒さに包まれた。

「んっ、んちゅううつ、はあはあ、み、見ないで……んんっ、あつ、ふあああつ、わたしもう、もうダメ……あんっ、おチンポ熱くてアソコが、オマンコがジクジクして……」

「うああつ、俺も出る、お嬢様オマンコ見ながら口に、くっ、くううつ」

「あんっ、んちゅつ、あゝしもイク、イクのっ、おっぱい揉まれながらお尻の奥まで突かれて、ああつ、あつ、翔くちのチンポ舐めながら、あつあつあつ、あああああつ」

「尻穴が締まって、いくぜヤリマン、くっ、くうつ、くおおおつ」

「みんな気持ちよさそうで、うっ、僕も、僕もでる、夏海ねえの口に出るっ」

全員の興奮がシンクロしたように快楽の音が部屋に響き、絶頂に向かう腰が激しく動き出した。

お尻を突くペニスはピストンを速め、しゃぶられているふたりの男子は腰を跳ねさせるように動かしながら亀頭を膨らましていく。

桜香と夏海の唇は卑猥に歪み、まるで膣を突かれているように唾液を飛び散らせた。

「んちゅっ、見て翔うち、あくしが他の男にお尻犯されながらイクとこ見て、おっぱいも、んちゅっ、んっんっんっ、んっ、んあああう、ふああああああああっ」

「あっ、見ないで、わたしがイクところなんて、ああっ、あっあっあっ、あむっ、んちゅっ、んぶっんぶっ、んああっ、んぢゅっ、んぶっ、んぶううううううっ」

オマンコに舌を入れられ、ペニスをしゃぶっている桜香の身体がピクピクと震えた。

膣内を舐められる焦燥的なムズ痒さ、そして喉を突かれるたびに頭の中まで響いてくる衝撃に、もう精液を注がれながらイクことしか考えられない。

夏海もお尻の快楽とフェラしている息苦しさに身体が痙攣しはじめ、絶頂間近になったふたりの魔法少女の膣口から大量の愛液が溢れていく。

「ん、んちゅぱっ、オマンコの中で舌が、んぶっ、んぼっんぶっ、イク、わたしおチンポ

しゃぶりながらオマンコ舐められてイク、んっ、んぶっ、んぼっんぶっんぢゅぶっ」

「あ〜しイク、あんっ、お尻犯されながら翔〜ちのチンポしゃぶって、んちゅっ、んっんっんっ、飲ませて、翔〜ちのザーメンゴクゴクさせて、あんっ、あっあっ、んちゅううっ」
揉まれている大きな胸と下を向いて少し大きくなった柔房が激しく揺れ、ペニスをしゃぶる唇から上ずった声が聞こえた。

ふたりのオマンコは完全に開ききって淫唇を震わせ、小さく空いた膣口から吹き出すように愛液が溢れていく。

（んっ、あ、あの男子が、翔一がわたし以外の女であんなに気持ちよさそうに、だったらわたしだって別の男子を気持ちよくさせて一緒に、一緒にイッて……あっ、あああっ）

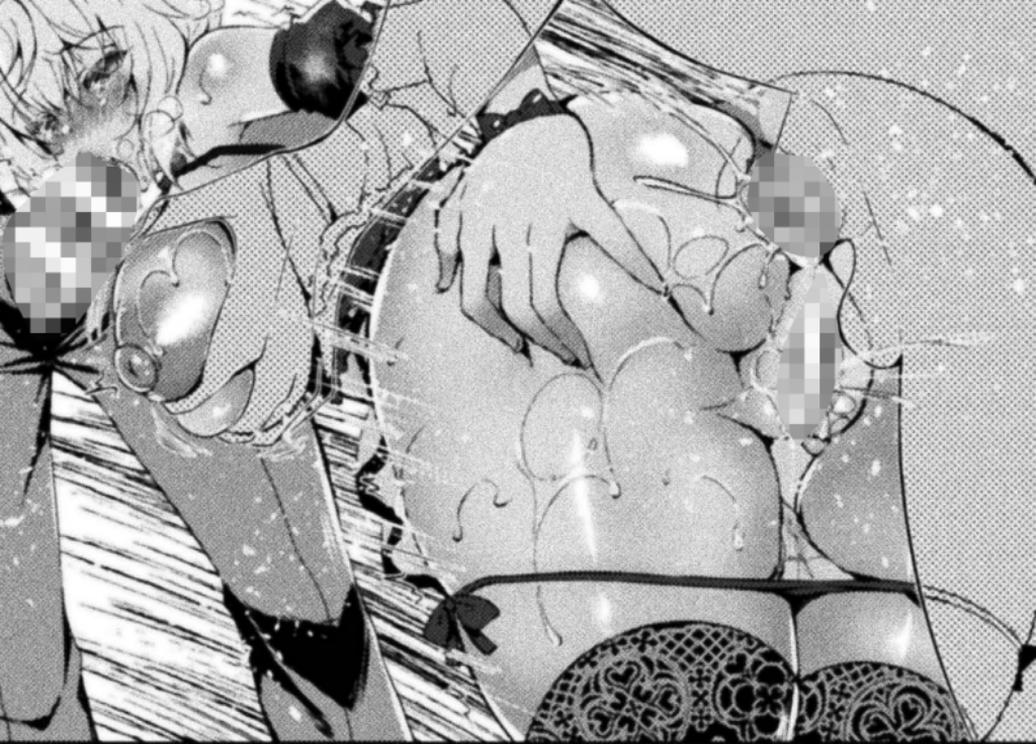
自分以外の女で気持ちよくなっている翔一に腹が立ってきた。

あんなことまでして魔因子浄化してあげたのに、他の女の口であんなに気持ちよさそうな顔をしている。

それが許せなくて、自分も他の男子で気持ちよくなっている姿を見せつけたくなった。

（見なさい翔一、わたしだって気持ちいいんだから、翔一以外のチンポしゃぶってイカせてあげて、いっしょにイッてあげ……）

「んああああああああああああっ！」



「んあああああああつ！ 出てる、お尻の中でビュルビュル出てる！ あんっ、翔くちのも顔にかかって、んっ、イッてる、あゝしお尻でイッてるくくくくくっ！」

「んううう……んっ、んぼっ、んぶっ、んっ、んぶううううう……喉れビクビクつれ……ドロドロひらのが……んっ、んぶっ、んぶえええええっ……」

おっぱいに指を食い込まされながら抱き着かれた夏海は身体を痙攣させ、大量に注がれる精子をお尻の奥に飲み込みながら幼馴染みの精子を顔で受け止めた。

チンポを咥えたまま絶頂した桜香は注がれる白濁液を飲み込めずに唇から零し。小さなおっぱいを可愛らしく揺らしながら大量の汗を白い肌に流していく。

「んうううっ、んっ……お尻気持ちいい……翔くちの残りは……ぢゅるるるっ、んちゅっ、んぢゅる、ぢゅるぢゅるぢゅるぢゅる！」

「あ、夏海ねえ……くあああつ！」

まだびゅくびゅくと精液を飛ばしている翔一のペニスを夏海は咥え、数回頭を前後させただけで二度目の精液を噴き出させた。

一度目よりも濃厚で多い精子は火傷するような熱で幼馴染みの口の中を灼き、口唇から溢れて黒ギャル魔法少女の胸元に流れていく。

「あ、ああ……」

「んくっ、んっ、ああっ、あふっ、んっ、んんう……っ……はあはあ……あううっ!？」

「あ……ああ……また顔と口が……んんっ、あ……あきやあああっ!？」

夏海の唇に大量射精した翔一が浄化の光に包まれ、黒い靄を消滅させながら眠るように倒れた瞬間、残りふたりの男子も魔因子を消滅させながら倒れた。

ペニスが抜けた瞬間にはびゅるっ最後の射精が^{ほとぼし}迸り、桜香の可愛らしい顔と小さな胸を、そして夏海のお尻をさらに汚してくる。

「あ、ああ……また胸まで、口の中も苦い液でいっぱいですわ……」

「あはは、犯されそうになって悲鳴するなんてエッチ魔法少女失格う……っ」
「な、なんですすっ……っ!」

お尻から精液をダラダラと溢れさせた夏海が桜香の前に立ち、精液まみれに悲しむ新米魔法少女を見下した。

彼女の胸元は翔一の精液で白く汚れ、日に焼けた肌をトロトロと流れて薄赤い乳首に絡まっていく。

「もうやめちゃえば、お・こ・ちゃ・まつ!」

桜香をバカにしたように笑った夏海は慣れた手つきで三人の記憶を消すと、お尻を振りながら立ち去っていった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

淫紋つきで挑む淫らな体育祭で勝利を掴むことはできるのか!?

スポーツ大好き女子校生の輝木ミコトは、友達以上恋人未満な関係の幼なじみ元喜一郎たちと毎日運動をしながら楽しく過ごしていた。そんなある日、スポーツを地球から奪うために現れた宇宙人、プリンス・アウターの精神支配によって、人類が無気力なスポーツ嫌い状態に陥ってしまう。唯一その支配におかされたミコトは変身ヒロイン、ビビッドガールに変身するが……。敗北したミコトを待っていたのは常識改変された淫らな体育祭! パイズ玉入れ、挿入ムカデ競走、セックス全目録。身体に刻まれた淫紋の力はミコトの正義と淡い恋心を伴いてゆく……。

木森山水道

挿絵:sue



優良 健優
ビビッドガール
VIVID GIRL
淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン

電子書籍限定の二次元ドリームノベルズが登場!

表紙はもちろん、描き下ろしモノクロイラストも収録! ボリュームたっぷりでお送りします。

新たな魔王の孕み娘!?
女性化させられた元勇者は

黒井鶴
挿絵/umiHAL

TS勇者クリス
魔物ファックで 棘原産卵



小説
魔装少女ナギ
挿絵 権精練乳

魔装を身に纏い、愛しき人の為には戦う少女にNTRの毒牙が襲い掛かる!

各作品とも各電子書籍サイトにて好評発売中!

編集・発行 **キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 3Dコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3551-1208

最新情報は
オフィシャルサイトへ

キルタイムコミュニケーション

検索

二次元ドリームノベルズの元祖変身ヒロインが
電子書籍で帰ってきた!

サンダークラップス! リボーン

THUNDER CLAPS! REBORN

羽沢向一
挿絵：緑木邑

各電子書籍サイトにて好評発売中!



本誌にて好評連載中！
大人気同人ゲームの
単行本小説が
電子限定で登場！！

魔剣士 ジネ2

乙女穢されし戦場

原作：まくらからパーツ

小説：酒井仁 挿絵：桐島サトシ



全3巻各電子書籍サイトにて好評発売中!

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコビル TEL: 03-3555-3431 (販売) FAX: 03-3551-1208

最新情報は
オフィシャルサイトへ

キルタイムコミュニケーション

検索